

部には大きなトラフがあり、低気圧はこれにそって北上しましたが、距離が遠いため内陸には影響しませんでした。この二つのトラフは相互に調和を保ちつつ持続したもので、同じ期間に欧州で雨勝ちの天候が持続したのもこのようなトラフの性質によるものと考えられます。以上の状況が予想図によって予知されたので気象局は米国東部に平年以上の高温、西部に平年以下の低温を予報したのですがその結果は満足なものでした。これは一例に過ぎませんが、現在ではわれわれの長期予報は産業方面に利用されて十分な成果を収めているということができ



書 評

積雪シリーズ (1), (2), (3), (4)

—積雪科学館発行
各 70 円

1. 雪とは何か 3. 雪国の住居 3. 雪国の話
(以上勝谷稔著) 4. 雪譜物語 (松岡讓著)

本シリーズは毎年一冊ずつ刊行され現在上記冊が出ています。高校生程度に解り易く書かれてあるが、専門の気象技術者にとっても結構楽しい読物である。

(1). は雪についての簡単な解説 (2). は著者が深雪地の農家を主に歩き廻り、そのすまいの様子を調査された汗の結晶の成ったものである。特殊な型体の住居の夫々に科学的な理由が付けられているのは、全く成程とらなづかせられる。写真と口絵が豊富である。(3). は雪国の傳説等をあげ、それが如何に雪国の人々の生活の中から湧き出たものかに思いを到し、深雪地の生活様式についても述べられている。蛙の積雪量予想のインチキな話、銀山平の雪女の話は面白い。

以上積雪科学館が長岡市にある関係上、その例が主に新潟県内の場合を多くとっている。館長勝谷稔氏の深雪地の人々の生活を合理化し向上させるために、自身奮闘されておられる尊い努力の一片である。

(4). は鈴木牧之の“北越雪譜”が如何にして成ったか、云わばその縁起について書かれたものである。

(村山信彦)

長期の天候推移においては地域と時間の相互依存性が長期予報を非常に困難な問題にしていることは私の話でおわかりになったと思いますが、人間社会の問題についても同じことが言えるでしょう。しかしこのようにむずかしい長期予報の問題も研究の結果だんだん解決されて来て居り、最近では電子計算機の予報への導入も始められておりますから私は将来さらに大きな発展がなされるものと信じておるしだいであります。

これで私の講演を終ります。

(中央気象台予報課)

Physical Meteorology. John C. Johnson

A 5—Ⅻ+398 頁, 3000 円, 1954 年

MIT and John Wiley of Sons, New York

Massachusetts Institute of Technology で過去数年間物理気象学の大学本科に講義したものをもとにしてできた本である。内容は教科書風でいいねいに説明を進めている。章を 11 にかけてある。第 1 章：大気屈折、第 2 章：大気の散乱、第 3 章：大気視程の理論、第 4 章：地球大気の輻射過程、第 5 章：輻射研究及び地球熱経済、第 6 章：大気濁濁による屈折と回折、気象光学、第 7 章：雲粒子形成の物理条件、第 8 章：天然及び人工励起降水飛行機着氷及びレーダー気象学、第 9 章：空中電気、第 10 章：電雑層とオゾン層、第 11 章：高層の気温、密度、気圧及び湿度、付録：常数その他となっている。説明はたとえば第 1 章を見ると序、屈折現象の一般考察、地球屈折の理論、屈折係数の阻害効果、気象光学へ地球屈折理論の応用、浮島現象、沈降明滅、しん気楼、ラジオダクト、天文屈折、大気の散乱と 11 節にわけて説明し、文献 19 をあげさらに練習問題 7 つを示すという調子である。文献は 1952 年までのものがあげられている。日進月歩の物理気象学全般についてくわしい説明を求めてもむりであるが、とにかくこれだけにまとめられたものはコンペンデラム以外になく、そういう意味で楽に読める。物理気象学を専門としない人が読んで理解するのにつごうがよいし、専攻する者にとってはふりかえて全般的な理解を新にするのによい。いろいろな意味でアメリカの大学の教科書のスタイルをそなえている点は各頁の裏に読み取られる。アメリカの物理気象が実用に貢献しているかどうかについて大きな反省を要求されている時にやはりもう一度広い目で物理気象学をその方法論と歴史的な目で全般的にふりかえて見るのはおもしろいことであるが、そういうところまで本書に期待するのはむりである。

(伊東蘆白)